

■ 研究所だより

上平 泰博

縄文・弥生の時代は、何を問っていたのか

8月に入ると、戦争体験のない戦後生まれの者でも、平和への希求は強まる。石原莞爾の『世界最終戦論』とか、永田鉄山の『国家総動員』(口述録)などを読み解くと、当時のエリート軍人官僚たちの一連の著作と行動に震撼する。平時とは戦時と戦時のつかの間にしかなく、人類史を振り返ると戦時の方が長かったと放言する。それゆえ「維新だ」「革新だ」と挑発しながら、クーデータや対外戦争を策動し、国民に煽動と恐喝を繰り返していたのであろう。

ロンドン軍縮に一定の成果を上げ国際協調路線を貫いた浜口雄幸首相は1930年11月14日、東京駅のホームで右翼テロの凶弾に倒れている。そして翌年8月に永眠する。その3週間後、待ち構えていたかのように「満州事変」が勃発した。この謀議は関東軍高級参謀の板垣、石原らによって周到に計画され、柳条湖で鉄道爆破が決行されたことを端緒とする。これを契機に軍政統治は本格化し、「大正デモクラシー」以後の時代の潮目は大きく変わっていった。それから15年後、その責任の所在を曖昧にしたまま、敗戦と戦後を迎えている。

8月に終戦が告げられ、逃れられなかつた約束事から、また知らず知らずのうちに刷り込まれていた呪縛思考から解放され、憤憤やるかたない軍国主義的な思想や歴史観と訣別したかにみえた。

ところが、である。事は過去の話かと思ひきや、軍人から政治家に戦後代替わりしただけで、今も中国軍の動向を意識した「南北諸島防衛」と称する国防配備実行計画が着々と突き進んでいる。

日本人は戦争を欲せず、戦争を放棄して、71年間なんとか戦争をしなかった時代があったと、反論したくなる。もっと言えば、「日本人」と呼ばれることのなかった日本列島に暮らした縄文人は、戦争などしなかったのではないかと。

最近の学説によると、日本列島に人類が到達出現して住みはじめたのは3万8000年前らしい。旧石器時代の次なる時代が縄文時代で、北海道と沖縄をのぞき過去1万3000年前から紀元前の10世紀ころまで約1万2000年もつづいた。

そして九州北部あたりから始まる次なる弥生時代は、本格的に水田稲作の始まる紀元前10世紀ころから、紀元後3世紀までの1300年間。もうここまでが「日本史」の95%を占める。しかし日本史記述の大半を占有しているのは、逆にそれ以降の5%の時代だ。もし1万年以上つづいた縄文時代からを日本史のはじまりだとすると、日本史の80%以上は縄文の時代。歴史の本質は原初にありきだ。

国家の成立と文字使用が見られないからと困惑してしまうのは、日本史家と時代時

代の権力者だけだろう。発展史観から見れば縄文時代は長いだけで、未熟で遅れた古い時代の話となる。時代の権力者は権力基盤を得る大義名分として、前の時代を悪く言い放ち、自分たちに都合のいい解釈をして歴史観を確立して転覆してきた。前時代を切って捨てないことには、新たな権力を盤石に保てなかつたからだ。

日本史のはじまりは、国家統治の形相が見えてくる古墳時代を始まりにしないと、国家形態を否定されかねない。戦後すぐの学校教育には、縄文時代という記述もなかつたし、その後も縄文・弥生は「オマケ」の時代だった。

日本史の摩訶不思議はそれだけではない。長かった旧石器、縄文、弥生の時代区分に比べると、その後はなんとも短命な時代区分ではないか。なぜ飛鳥時代、奈良時代、平安時代…明治時代、大正時代、昭和時代と呼称するのか。そもそも、どうして政権政争の交代を基準に時代区分されなければならなかつたのか。

なぜ日本歴史のスタートを国家のなかつた縄文時代からにと、歴史の価値認識の大転換をしないのか。もはや縄文は縄文の時代ではなく「縄文文明」であって、世界の数々の文明に匹敵するとの見識をNHKの特番は三内丸山遺跡と諏訪の御柱で放映しており、突飛な見解でもない。

縄文と弥生の到来は、政権交代のように新時代が突如やって来て変容したわけではない。縄文と弥生の日本列島上での勢力分布域は、碁石を取り合うように変容し、重

複同居もしている。北海道を中心とした続縄文の文化と奄美沖縄の貝塚文化は、弥生時代の晚期でもずっと続く。つまり西日本中心の弥生時代に同床異夢のまま本州にも縄文時代が混在しながら、四つの文化圏が同時に併存していた。

弥生時代には青銅器や鉄器の使用が始まったと教えられたが、この時代を象徴する佐賀県吉野ヶ里遺跡の発見によって、階層ごとに住居の異なる環濠集落が形成され、身分秩序の表れを見てとれたのは後々の見解である。

日本の王家成立の真相をめぐって巷でも繰り返されてきた推論の書が『魏志倭人伝』(魏書東夷伝)である。そこには「下戸與大人相逢道路逡巡入草(後略)」とあるように、庶民たる「下戸」は、支配層である「大人」と道路で出会ったとき草むらに土下座ひれ伏したといった記述がある。ところが邪馬台国はどこにあったのか、卑弥呼とは誰なのかと『魏志倭人伝』解釈がヒートしてきた。弥生2世紀ころの階層分化は些細なことだろうか。2000弱の文字しかない『魏志倭人伝』には、「大人」「下戸」それぞれ別の箇所にも3か所の用例がある。戦争奴隸者を意味した「生口」を貢などという語彙が5か所ほど登場している。なぜ倭の奴の国に当時100余の小さな国々があつて、すでに貧富の差も生じていたのか。対馬国の記述にも見られるように、一般民衆はアニミズムとシャーマニズムの世界にあって、仏教や儒教の影響は受けていたのは渡来人くらいだったと考えられる。

ところが、それ以前の1万年以上つづいた縄文時代は、自然と共生するエコロジーな文明とされ、日本(人)文化の基層をなしていると言われてきた。縄文の人々は人類史上比類なき世界最古の土器を作り続けてきたことでも知られている。

青森県の三内丸山遺跡を見学して、復元された巨大なクリの木の立柱を見たとき、巨大建造物の神殿跡かと誰もが想像をかきたてられよう。この縄文遺跡は紀元前3500年から2000年頃まで存続したというから、ご当地で1500年間も持続可能な暮らしを続けていたことになる。

日本列島全域に住み、大自然のなかに伸つつましく暮らしていた縄文の人々は、狩猟・採集生活を基本とする定住生活者であった。貝塚や魚の採取のみならず、森林の小動物や木の実、鳥などを狩猟採集している。瓢箪、エゴマなどの栽培植物も見られ、栗なども栽培管理されていたようである。縄文時代は、衣服や住居など生活様式の全般にわたって、想像以上に高度で洗練された循環型の社会を形成していたことが最新の研究で報告されている。

縄文の食文化は磨製石器を駆使した調理方法なので、土器ばかりか石で蒸し焼きにした料理場跡も出土している。酒も造って嗜んでいたらしい。漆塗りの丸太舟が外洋に繰り出してもいたことから高度な海洋技術をもっていたことがわかる。縄文人の太平洋横断説まで近年の研究では有力となっている。稀に見る高度な社会を構築していたことは縄文人の暮らしぶりから明らか。

さらに驚くべくことに縄文時代からは、戦争のつめ跡が見られないのだという。矢尻や弓矢は動物を捕獲するのに使ったもので、人を殺す武器としては使用されていなかったというのだ。相手の縄張りまで押し入って、血みどろの戦いをする意味など見いだせなかったのだろう。これまでに発見された縄文の人骨約5千体のうち、殺傷された形跡のある縄文人の遺骨はわずか15体に過ぎず、弥生時代の人骨と比すると、10分の1程度だったらしい。

日本列島に暮らしていた縄文人は、農耕民と遊牧民が生死を懸けて争った形跡などないというわけだ。三内丸山遺跡からは、武器らしいものは一切発掘されておらず、遺跡全体が城壁で囲われていた形跡もないと報告されている。人を殺せるほどの武器がなかったのかもしれない。だから軍人はいない。

これからも生き残れるのかと心配している近現代人は、太古の縄文文明に光があてられていることを肝に銘じるべきであろう。その特質は自然との共生のみならず、自然循環型の高度な社会を築き、今まで求めんとしている場所が、皮肉なことに1万年以上前の自分たち祖先の足下で手に入れられていたことである。日本列島固有の森と海のある、風土に適応した永続的・普遍的な生活様式を確立した縄文文明は、世界史的にみても「日本文明」の原点といえるのではないか。

国家と文字と鉱石貴金属加工の有無によって、文明誕生の認否をする西欧文明概

念の発想から先ず再検討されなければ、あるいは近代工業技術文明を基層とする発想から、次代の新文明の活路を見いだすことなど不可能であろう。ほぼ破滅である。

先月の特集号「自然観と生命観を問う農事業」において、日本人の自然(じねん)観と自然(しぜん)観の使い方の変移を問うたが、それは7世紀以降からの話であって、縄文時代の話となれば別である。

縄文の人々は大自然の巨木巨石に畏れ、それは神々であると崇め拝み、獲得した食物も和して平等に分け合い、大らかで多様な縄文土器をはじめとする芸術文化の心を育て、祈念の対象であった土偶を残しているのだ。自然の豊かさが心の豊かさを育み、大自然を実直に畏れ、しかも賢く利用して独特の世界観をつくりあげていた。縄文人の世界観こそが、日本人の世界観と自然観の土台になっていることは間違いない。そこには万物そのものを神と捉えるアニミズムとシャーマニズムの原点を見出すことができるだけでなく、墓を造営していた様子からして、先祖崇拜の原型がうかがえる。縄文人の自然崇拜と先祖崇拜の融合したものが土着の神道へとつながっている。

縄文時代に神社の原形を発見できるのは偶然ではない。縄文は神社形式を備える前の原始信仰の時代であって、「縄文神」「自然神」とでも呼ぶべき日本文化の基層をなしている。後世の権力者たちは何らかの意図をもって、縄文人の原初信仰を抹殺破壊

してきたことで、その痕跡は隠されてきた。

つまり日本の神道と仏教と儒教とが、縄文人の山岳森林アニミズムの信仰形態を換骨奪胎し、変形変容させ継承していったと言えなくもない。それが民衆抑圧と統制支配にもつながっている。

かつての縄文時代のように、分かち合いと支え合いと学びあいの共同・協同体の関係が少しでも築かれていけば、相手の憎しみは和らぎ薄まりもしよう。極端に不公平な格差と分断社会、能力主義競争による孤立貧困化といった経済的、人格的な矛盾の背景をみると、明らかに資本主義社会の存続を最優先している。高度経済成長を挟んで、庶民の智慧が当然のように機能していた地域社会での役割の分担と出番を崩壊させた。そうしないことには金儲けグローバル金融資本主義は維持できないからである。

その結果、きわめて脆弱な孤立した生活世界の中で人々は成立している。依存と分断体質は権力者にとって都合がいい。その「危機」に対面しているのが、復古調に流れる高度国防国家型の国民統治システムだろう。

武器があれば、いつかは使われ、自然と人は傷つく。再び神武天皇の東征を利用して、太平洋戦争の抑揚スローガンに使った「撃ちてし止まん」(古事記)だろうか。

それとも大戦の悲惨と愛国の不条理を描いた「武器よさらば」か。